

## 049 十二使徒の選抜 アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダ(=タダイ)

(マタイによる福音書 10 : 1~4、マルコによる福音書 3 : 13~19)

ルカによる福音書 6 : 12~16

12 そのころ、イエスは祈るために山 (NIV:a mountainside、NKJV:the mountain)に行き、神に祈って夜を明かされた。

13 朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。

14 それは、イエスがペトロと名付けられた**①シモン**、その兄弟**②アンデレ**、

そして、**③ヤコブ** (=大ヤコブ、ゼベダイの子、ヨハネの兄)、**④ヨハネ** (=大ヤコブの弟、最年少)、

**⑤フィリポ**、**⑥バルトロマイ** (=ナタナエル)、

15 **⑦マタイ** (=レビ、徴税人)、**⑧トマス**、アルファイの子**⑨ヤコブ** (=小ヤコブ、義人ヤコブ)、熱心党 (→ギリシア語「ゼーローテス」(熱心な者)、ローマに対抗して戦ったユダヤ人グループのメンバーに付けられた名称) と呼ばれた**⑩シモン**、

16 ヤコブの子**⑪ユダ** (=タダイ)、それに後に裏切り者となったイスカリオテ (→ユダヤの地域「ケリオテ」の出身) の**⑫ユダ**である。

### <1>アルファイの子ヤコブ

#### **⑨ヤコブ** Jacobus

→James「かかをつかむもの」ヘブライ語 小ヤコブ、義人ヤコブ、アルファイの子

ヤコブはイエスの親族(弟→マタイによる福音書 13 : 55、マルコによる福音書 6 : 3、または従兄→カトリック等)で、「アルファイの子ヤコブ」あるいは「小ヤコブ」といわれる。イエスと顔がよく似ていたと言われているが、十二使徒の中では目立たない存在で、名前しか知られていない。教会を代表する人物として活躍し、初代エルサレム司教になった。「ヤコブの手紙」の著者といわれている。

エルサレムの神殿の屋根から突き落とされ、頭をこん棒でたたき割られて殉教したといわれている。

### <2>熱心党と呼ばれたシモン

#### **⑩シモン**(熱心党のシモン) Simon

→Simon「聞いている」ヘブライ語 反ローマ帝国の過激派組織「熱心党」

シモン(古代のユダヤ人に由来する人名。元々はユダヤ名のシメオン=Simeon)はイエスの弟子になる転向前は、ローマの支配に抵抗する愛国グループ熱心党のメンバーだった。熱心党のメンバーだっただけかなり過激な人物だったと想像できる。シモンはローマ人を屈服させられる指導者を探しており、その姿をイエスに重ね合わせていたのかもしれない。シモンは十二使徒の中ではヤコブの子ユダとも呼ばれるタダイと行動することが多かったようで、いつも名前が並べられている。

キリストの磔刑(たっけい)後エジプトに伝道し、その後、ユダ(タダイ)とともにペルシアやアルメニア(西アジアの南コーカサスに位置する共和制国家)で活動し、ペルシアで、現地の魔術師によって鋸で2つに切られ、殉教したとされる。

### <3>ヤコブの子ユダ

#### **⑪ユダ**(タダイ) Judas

→Judas「褒められた」ヘブライ語/小ヤコブの兄弟または子

タダイ(ユダ)に関する伝承は定かではないが、小ヤコブの兄弟であったともイエスの親族(主の兄弟)だったともいわれる。十二使徒として活動を共にしてはいたが、福音書には名前しか出てこない(マタイによる福音書 10 : 3、マルコによる福音書 3 : 18 の2か所のみ)。

イエスを裏切った「イスカリオテのユダ」とは別人で、「イスカリオテのユダ」と区別するため、「ヤコブの子ユダ」(ルカによる福音書 6 : 16、使徒言行録 1 : 13 の2か所のみ)とも呼ばれている。イエスを裏切って自殺した「イスカリオテのユダ」との混同を避けるために軽視されてきた(?)ようで、「忘れら

れた聖人」とも呼ばれた。タダイはバルトロマイとともにエデッサ（現ウルファ、トルコ南東部）やアルメニア（西アジアの南コーカサスに位置する共和制国家）に宣教したといわれる。彼らによってアルメニアに初めてキリスト教がもたらされたこととされ、アルメニア使徒教会は、彼らによって建てられた教会と伝えられている。

ペルシアで斧で殺害され、シモンとともに殉教したといわれている。

→ユダの手紙 1 節

イエス・キリストの僕で、ヤコブの兄弟であるユダから、父である神に愛され、イエス・キリストに守られている召された人たちへ。

### 【参考】熱心党

ユダヤ戦争（帝政ローマ期の AD66 年から 73 年まで、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間で行われた戦争で、ユダヤ属州総督のローマ人フロルスがエルサレムの第二神殿の宝物（17 タラントン=17×6000 ドラクメ〈1 ドラクメ=1 日の日当〉/タラントン≒1 億円-の金）を奪ったことに端を発している）の時、反ローマの暴動の中核をなしたのは、熱心党 (Zealotry) と呼ばれる人たちであった。ヘブライ語で「カーナイーム」、ギリシア語で「ゼーロタイ」（熱心な人々）という。

ローマはユダヤを直接支配下に置き、徴税組織を整備するためとユダヤ人の財産を査定する目的で AD6 年（ルカによる福音書 2 : 2 : キリニウスは AD6 年、シリアの総督になった）に住民登録（人口調査）を実施した（同 2 : 1）。これに対し、唯一の神のみを支配者とするユダヤ人が、ローマ皇帝に納税することは決して許されないと武力で反乱を起こしたのが熱心党であった。

熱心党は、教養というより、律法を守ることを優先し、それが侵された場合は武力で抵抗する考えを持つ教派であった。彼らは神より与えられた救済を考えていたが、この救済をもたらすためには神は人間の協力を頼りにしていると確信していた。勝利するためには暴力の使用を認め、戦いで命を失うことは神の名における聖者になるための殉教だとした。

熱心党運動のイデオロギー（思想傾向、社会等に対する考え方）は、ファリサイ派の中から生じた過激な行動理論であった。熱心党は、ユダ<sup>※2</sup>を中心としたガリラヤ派と、ザドクを中心としたエルサレム派の二派があった。

特に熱心党の中で最も過激な暗殺者集団は、「ガリラヤの短剣党（シカリー派 Sicarii）」（四千人の暗殺者：使徒言行録 21 : 38）と呼ばれ、常に懐に短刀（シカ：ラテン語）を忍ばせ、反対派を暗殺した。

また、激烈な内部抗争もあり、各派閥間の関係も複雑であった。後、民衆の支持を受けた熱心党のゲリラ活動が激化、社会の秩序と治安は失われ、ユダヤは無政府状態に陥った。

熱心党の人々が暴力を正当化した根拠は、民数記 25 : 10~11 にあるとしている（歴史によればあまりに過激すぎるのでエルサレムを追放され、略奪や集団虐殺を繰り返して辺境地帯をさまよい、AD73 年の春、マサダの戦いで殲滅したとされている）。「ユダヤ戦記」および「ユダヤ古代史」の中で、著者フラウィウス・ヨセフスは、熱心党は過激すぎて、古代イスラエル王国を消滅させた元凶であると記している。

→民数記 25 : 10~11

主はモーセに仰せになった。「祭司アロンの孫で、エルアザルの子であるピネハスは、わたしがイスラエルの人々に抱く熱情と同じ熱情によって彼らに対するわたしの怒りを去らせた。それでわたしは、わたしの熱情をもってイスラエルの人々を絶ち滅ぼすことはしなかった。」

※2：その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こした（AD6）が、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた（使徒言行録 5 : 37）。